

教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の
状況の点検及び評価報告書
(平成27年度事業分)

庄内町教育委員会

平成28年9月

1 点検及び評価制度の概要

この報告書は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第26条第1項の規定により教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況について点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、これを議会に提出するとともに、公表しなければならないことに基づき作成するものである。

2 点検及び評価の手法

外部評価を行うこととし、下記の学識経験を有する者の知見の活用をするものとする。

第一次外部評価	学校教育	実務的専門家	鎌田 央	狩川東興野
	社会教育	実務的専門家	中里 健	鶴岡市宝町
第二次外部評価	総括	学問的専門家	小野 英一	東北公益文科大学

3 点検及び評価の対象

「平成27年度庄内町教育委員会の重点と視座」に基づいた学校教育と社会教育の「政策及び施策」レベルの事業

4 外部評価の内容

以下報告書のとおり

小 野 英 一

本外部評価は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条に基づき、毎年教育委員会の権限に属する事務の管理・執行の状況について点検・評価を行うものである。評価対象は「庄内町教育委員会の重点と視座」（以下、「重点と視座」という。）に基づいた学校教育と社会教育の「政策及び施策」レベルの事業である。点検・評価の具体的な方法については法定されておらず各教育委員会に任されている。庄内町教育委員会では学校教育と社会教育の二人の専門家に点検・評価をお願いしている。

庄内町教育委員会における点検・評価の大きな特徴として、学校・社会教育に精通した二人の専門家が、何度も教育現場に足を運びながら点検・評価を実施しているという点が挙げられる。書類だけの点検・評価ではなく、日々教育が行われている現場としっかり向き合いながら点検・評価を行う基本姿勢は高く評価される。また、大変な時間と労力を費やし、点検・評価を行っている鎌田先生と中里先生、真摯に対応している教育現場の皆様には深甚なる敬意を表したい。

鎌田先生、中里先生の評価の総括において共通している点が、教育における「地域」の重要性である。鎌田先生からは、一貫して「つながる」ことにベクトルを向け、学校・園、家庭、地域のそれぞれに何ができるのか、果たすべき役割は何かを考えながら、子どもを支える緩やかなネットワークづくりを構想・推進するという揺るがぬ教育観・考え方が、次第に地域に浸透し、地域が積極的に教育に関わることで、地域の活性化も図られたとの指摘があった。また中里先生からは、「地域の子どもは、地域の人で育てる」という教育の基本についての確認、また、それを踏まえての庄内町在住の地元教師の増加という今後の課題についての提示が行われた。これまでの庄内町の教育における「地域」の役割・働きを引き続き守っていくとともに、今後さらに教育と「地域」に関わる様々な課題に取り組んでいくことが求められる。なお、地域づくり、地域課題解決等については、首長部局においても様々な課において施策・事業展開がなされており、首長部局の関係課といかに連携・協力することができるかという点も重要な課題である。

鎌田先生からは、評価の総括において、前述の揺るがぬ教育観・考え方が「重点と視座」の文言に如実に表れており、さらにこうした教育観・考え方が各校や園の共通認識を生み、重点や経営に反映されるとともに、庄内町ならではの特色ある教育実践につながったという評価があった。教育の理念がしっかりと「重点と視座」に落としこまれ、さらに教育現場において共通認識として形成され、教育実践へとつながっていったという点はまさに理想的な形であると考えられる。

平成27年10月に「庄内町教育振興基本計画」が策定された。計画期間は平成28年度から平成37年度までの10年間である。「庄内町教育振興基本計画」では基本方針ごとの目標指標が掲げられており、毎年度それを基にしながら主要施策の進捗状況や目標の達成状況を分析し、課題を整理しながら評価を行い、結果を公表することとされている。当評価は地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条に基づく評価となる。

「庄内町教育振興基本計画」は今後目指すべき教育の基本的な方向性や重点的に取り組むべき教育施策を明らかにしたものであり、今後の庄内町における教育の核心となるものである。同じく地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条に基づく評価対象であ

る「重点と視座」も「庄内町教育振興基本計画」に基づき毎年策定されることとなる。

「庄内町教育振興基本計画」について、中里先生から「文章や言葉使いに難解なところがあり、町民には丁寧な解説が必要」との指摘があった。「庄内町教育振興基本計画」は庄内町における教育の核心となるものであり、その重要性と意義・役割の大きさを踏まえれば、当然のことながら不足や不十分な状況があれば改善することが不可欠となる。今後計画を実行していく中で、教育現場や町民等の様々な意見を聞きながら、内容の不明な点についてはその内容を明確にし、また不足しているところについては内容や説明を補足しながら、磨き上げていくことが不可欠である。様々な機会や町報等の媒体を通して、町民への丁寧な説明の繰り返しも重要である。「庄内町教育振興基本計画」は教育委員会のみならず、町民のものとならなければならない。

また、「庄内町教育振興基本計画」の主要施策・目標と、「庄内町教育振興基本計画」に基づき今後毎年策定されることとなる「重点と視座」のリンク・整合性が重要である。それらのリンク・整合性が不十分であれば、教育現場も点検・評価する側も混迷することとなる。

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 26 条に基づく毎年の点検・評価は、教育事務における PDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルの徹底を目指したものととらえることができるが、この PDCA サイクルという観点から全体について最後に述べる。

「Plan」(計画)については、教育の理念、教育観が「重点と視座」という計画に反映され、「Do」(実施)については、教育の理念、教育観とともに「重点と視座」の計画が、教育の現場に落とし込まれ、各教育現場、地域において特色ある豊かな教育実践が展開されている。また「Check」(点検・評価)についても、学校・社会教育に精通した二人の専門家が、何度も教育現場に足を運び、現場と向き合いながら点検・評価を実施している。今後、点検・評価を踏まえながら、さらなる向上・進化を目指して「Action」(改善・改良)を重ね、フィードバックしていくことが期待される。

Plan-Do-Check-Action が良く連結し、PDCA サイクルがしっかりと回っていくためには、教育委員会の教育行政と教育現場の連携・良好な関係が不可欠である。庄内町においては、ギャップが生まれがちな教育委員会の教育行政と教育現場の間に望ましい関係が築かれているとの指摘が鎌田先生よりあったが、それが PDCA サイクルの充実を生み出している大きな要因の一つであると考えられる。これについては庄内町教育委員会の大きな財産でもあり、ぜひ今後も大切に維持されていくことを望みたい。

以上のように、庄内町教育委員会の教育事務においては、もちろん個々の段階、各現場では様々な課題はあるのであろうが、PDCA サイクルという観点から全体としては評価できる。平成 28 年度分からは「庄内町教育振興基本計画」を中心とした新たな PDCA サイクルが展開されていくことになるが、さらにより良いものとなっていくよう、今後の発展に期待したい。

1 思いやる心と健やかな体を育む教育の充実

■一人の人間として自立し、志を高め、挑戦する教育の推進

○学校教育目標や子ども像、経営の重点等に「自立」や「挑戦意欲」、「たくましさ」や「鍛え合い」を掲げ、課題意識を持って様々な取り組みを進めている学校が多い。

●「競い合いながらたくましさを育てる」活動や自主的活動の達成度が伸び悩んだり、二極化傾向や個人差が顕在化したりしてきた学校がある。また、生活リズムや時間の自己管理等について課題意識を持つ保護者が多い。日常の学習や活動の具体的な場面で指導することとともに、子どもの心に火をつける機会（講話や体験）を意図的・継続的に設定していくことが必要と思われる。

立川小…自校の『建学の精神』にある「切磋琢磨する子どもたち」を育てるために、「心のエネルギー」（学ぶ力・かかわる力・挑戦する力）を高める学校経営を進めている。『建学の精神』を子どもにも理解できるように表現した『建学の志』を制定し、体育館へ掲示し、全校で唱和に取り組みながら、意識化・日常化を図っている。さらに、具体的な場面を通して文言の意味を実感的に理解させ、根付かせることに努めている。挑戦意欲を持って各種コンクールへ応募することを全校で推奨し、多くの優れた成績を上げることができた。

余一小…めざす子ども像の一つに『初めてのことに挑戦できる子』を掲げ、全校で取り組んでいる。

《学校評価アンケート結果より》

・児童による評価 … 「初めてのことに挑戦している」 A・B評価	89%	↑
・保護者による評価… 「挑戦や活動の意欲」	91%	↑

余四小…学校経営の重点に『自分の立てた目標に向かって挑戦し続ける子どもの育成』を掲げ、音読・読書・運動等に全校で取り組んでいる。

《学校評価アンケート結果より》 ※注 満点は4点

・保護者による評価… 「チャレンジ(運動)に意欲的に取り組んでいる」	
A・B評価	3.5 ↑
「チャレンジ(生活・文化) 」	3.0
「苦手なことや苦しいことでもあきらめないで最後までやろうとした」	3.1
・教職員による評価… 「目標に向かい挑戦する子どもの育成(読書)」	3.3 ↑

立川中…伝統的校訓である「文武両道」と「為せば成る」を基底とし、経営の基本方針に「生徒会活動と連動しながら、生徒の自主性、主体性、自浄力を一層伸ばす」を掲げながら、生徒主体の活動や行事づくりを進めている。

《学校評価アンケート結果より》

「人と協力，自主的に行動する」 A・B評価	生徒 98%↑	保護者 90%↑
「係活動に協力，責任を持って仕事」	生徒 98%↑	保護者 90%↑
「自分たちの力で作り上げ，満足できる行事」	生徒 97%	保護者 96%

■道徳を柱に，日常生活や，人や社会に役立つ心を育む教育活動，講話等の積極的などりこみ

○道徳の「教科化」の前提にあるのは，実効性のある，教育効果が具体的に見える道徳授業への転換である。そして，その背景にあるのは，深刻化する子どもたちの心の問題への積極的な教育的対応に他ならない。一人一人の子どもたちが本気で自分を見つめ，自らの内なる「よさ」に気づき，よりよい未来を切り拓いていく羅針盤を見つけることができるような道徳授業への転換が強く求められていることを認識し，教委としてしっかりと本質を見据えた授業づくりを指導している。

○道徳教育の取り組みについて学校間格差や教員格差が問題になっていることを踏まえ，教員の意識改革と資質・能力の向上を目指して，学校長がリーダーシップを発揮し，組織的な指導体制を構築し，学校全体の取り組み方針を明確にして全教員の共通理解を図りながら，道徳授業・道徳教育の改善に取り組むことが求められている。それは即ち，これまで本町教育委員会が推し進めてきた「高い授業力を有する教員の育成」，「校長・園長のカリキュラムマネジメントによる学校づくり」の延長線上にあり，その視点を道徳教育にも取り入れ，これまでの取り組みを生かしながら，道徳教育の改善を進めている。

○道徳教育推進校の立川小学校において，「生きる力＝総合的な人間力」のもととなる「心のエネルギー」を育むことを目指し，道徳を窓口にした研究・実践が進められている。年2回道徳授業研究会を実施して道徳の時間の充実を図るとともに，他教科・領域・行事との関連を図った総合単元の構成や，地域素材の活用等にも取り組んでいる。また，開校時から取り組んできた独自の『立川しぐさ』（にっこりしぐさ・あったかしぐさ・思いやりしぐさ）を，道徳的实践力が発揮された一つの姿として再確認し，日常的に意識させながら，全校で実践化を図っている。

立川小…『夢をもって豊かにかかわり，自己の生き方をよりよくしていく子どもの育成』

研究3年次の今年度は，「心に響く道徳の時間の充実」をめざし，「発問の工夫」と「交流の場の充実」を重点課題に，効果的な手立ての在り方を探った。主題を直接問う，選択肢を設ける等の発問の工夫や発問の精選により，ねらいとする価値に近づける実践を積み上げている。付箋紙やホワイトボードの活用等，学年の実態や主題に応じたペアやグループでの交流を工夫しながら，個々の児童の思考を促し，全体の話し合いの深まりを図っている。

《学校評価アンケート結果より》

- ・児童による評価… 「立川しぐさへの取り組み」 A・B評価 91% ↑
「学校のきまりや校外生活のやくそくごと」 93%
「困ったことの相談や励まし」 91% ↑
- ・保護者による評価… 「立川しぐさを中心にした思いやりや自主性を高める指導」 92%
「学校の決まりや校外生活のやくそく等」 94%
- ・学校の分析… 「道徳の時間→行事→道徳」のように行事を絡めた指導で実践力をつけるような仕組みを強化

○道徳教育を学校づくりの基盤として全校的な取り組みを推進し、子どもの心を育もうとしている学校が多い。自校の実情に即した独自の取り組みを工夫している。学校研究と連動させながら、人と関わる力、相手理解や思いやりの心を育てる取り組みを進めている学校がある。

余一小…めざす子ども像の一つに『がんばっている友達が紹介できる子』を掲げ、全校で取り組んでいる。友達の頑張っている姿を見つけようとするのが日常化されるとともに、子どもたちの関わり方や学級の雰囲気良くなってきている。

《学校評価アンケート結果より》

- ・児童による評価… 「友達となかよくしている」 A・B評価 97%
「頑張っている友達を見つけ紹介」 84% ↑
- ・保護者による評価… 「相手理解」 94% ↑

余二小…日常の縦割り班活動や交流活動に『ピア・サポートプログラム』（トレーニング・プランニング・実践・フォローアップ）を取り入れ、思いやりの心の育成や、助け合い、支えあう人間関係づくりを図っている。

《学校評価アンケート結果より》

- ・児童による評価… 「友達となかよくできた」 A・B評価 97%
- ・保護者による評価… 学年重点取り組みの『やさしい子』について A・B評価 86%
- ・5年「相手のことを考え、みんなのために進んで行動できる」 90%
- ・6年「相手の気持ちを考え、みんなのために行動することができる」 86%
- ・保護者による評価… 「思いやりのある行動」 85% ↑
- ・教職員による評価… 「思いやりのある子どもに育っている」 93%

余三小…学校教育目標「伝えることができる人を育てる」を掲げ、学校経営を進めている。言葉を通して互いの考えを理解し、相手の考えを尊重する心を育てている。

《学校評価アンケート結果より》

- ・児童による評価… 「学級・学年のみんなと活動するのはたのしい」
A・B評価 96% ↑
「ちがう学年の人と活動するのはたのしい」 88% ↑
「伝えることがじょうずになった」 85% ↑
- ・保護者による評価… 「学校は伝えることができる子どもの育成に努力している」
93% ↑

余四小…経営の重点に『豊かな体験活動・交流活動を通した心の教育』を掲げ、全校で縦割り班活動を推進しながら、互いを思いやる心、励まし合い助け合う関係を育てている。

《学校評価アンケート結果より》※注 満点は4点

- ・保護者による評価… 「異学年とうまく活動している」 3.5
「多くの人とのかかわりの中で、自己を見つめ、他を思いやる心が育まれた」 3.4 ↑

立川中…言語活動を基盤とした学習活動を展開し、生徒同士の関わり合い、高め合いを重視した学習活動の日常化が図られた。また、道徳的な価値の育成やその実践化を図り、道徳の授業研を実施するとともに、生徒会活動、地域学習、学級づくり等々の活動と連動させながら、「自他を尊重する心」「共生社会の中で貢献する心」を育てている。

《学校評価アンケート結果より》

「自分も他の人も大切にしている」 A・B評価	生徒：94%	保護者：88%
「感謝・思いやりの心を持っている」	生徒：93%	保護者：92% ↑
「積極的に自分の考えを発表」	生徒88% ↑	保護者：80% ↑
「自分の考えを語尾まではっきり伝える」	生徒87% ↑	保護者：71%

＜人や社会の役に立つ教育活動1 南三陸町への復興支援交流＞

○各学校、児童生徒会、PTA、町等々で、様々な復興支援活動や交流体験活動が企画され、継続的に実施されている。それらの体験を通し、人のために動く喜び、自己肯定感や自己有用感、継続して行うことの重要性の認識など多くのことを学んでいる。人のために尽くす体験を重ねることで、感謝の気持ちや人を思いやる心も育ってきている。

○東日本大震災から5年目となるが、継続してきた支援活動や交流活動を通して、現地の人たちが今必要としていることは何かを捉え、活動内容を工夫している。交流を通して現地の人たちと共に歩んでいこうとする気持ちが育っている。

立川小・余一小…同窓会やJA、地元生産農家の指導のもと、児童が育てた新米を秋に支援米として南三陸町の小学校に送る活動を継続し、温かい心の交流が続いている。

余三小…6年生の修学旅行で南三陸町の伊里前小学校を訪問，仮設住宅の住民会長の話を聞くなどして，その体験を文化祭で発表した。現状に応じた復興支援や心の交流の必要性を実感的に捉え，保護者や地域住民に伝える機会となった。自分たちで育てた枝豆を売って集めた義捐金を寄贈する活動も継続している。

余四小…学習旅行で来町した南三陸町の伊里前小学校5年生と交流活動。ドッジビー（フリスビーを使ったドッジボール）や肩組み記念写真撮影等を通して自然に打ち解け合い，支援の思いを深めた。

立川中…10月の文化祭で，2年生が7月に訪問した南三陸町の様子について発表，同町産の海産物や仮設住宅住民が作ったアクリルたわし等の販売コーナーを設け，全校生徒や来校者に購入支援を呼びかけた。追加注文が出るほどの盛況に，今後も活動を工夫しながら，支援を継続していく決意を新たにされた。東日本大震災から5年目を迎えた3/11，『3・11 忘れない 希望の灯 2016』の看板と生徒一人一人が思いを込めて寄せ書きした2枚の旗を掲げ，立川庁舎のロビーで，1・2年生有志による慰霊合唱を行った。歌で支援の輪を広げようと，昨年度から生徒会活動の一環として行っている。復興応援の思いを託し，旗を南三陸町の歌津漁協に送った。

余目中…生徒会では，『余中プライド～つなげよう 届けよう 私たちの想い』をスローガンに，今年度も南三陸町の復興支援活動に取り組んだ。この活動を全校のものにすべく，各学年でテーマを設定し，それぞれ支援活動を展開。10月の文化祭の中でその活動の発表を行った。最後に「花は咲く」を全校合唱し，今後の支援を誓い合った。

○11月に国際交流協会と町P連との合同主催で漁業体験交流が実施された。4回目の今年度は，町P連71名が参加して歌津地区伊里前漁港でワカメの種挟み作業を行い，地元漁協漁師らと交流した。

<人や社会の役に立つ教育活動2 地域ボランティア活動>

○多くの小中学校で児童・生徒会を中心に空き缶やプルタブ，エコキャップ，牛乳パック等の回収活動を継続的に展開し，身近な施設等へ寄贈している。全校での小さな取り組みが継続することで大きな成果になることを実感し，次の活動への意欲づけ，主体的活動の基盤となっている。

・毎年空き缶・プルタブ回収活動を行い，福祉施設へ車いすを寄贈。

（立川小：山水園へ 余一小：徳州苑へ 余二小：ソーラーナへ）

・ペットボトルキャップの回収活動を行い，発展途上国へポリオワクチンを贈る運動に協力。

（余二幼・余一小・余二小・余三小・立川中）

・毎年生徒が分担して各家庭を回り牛乳パックを回収。トイレトペーパーに換えて山水園に寄贈。（立川中）

■再生エネルギー教育による節約の気運の向上

<全国風サミット事業との連携>

○10月に開催された「全国風サミット in 庄内」の一環として，小中学校において「風の学校」が実施された。講演会を通して風力発電や再生可能エネルギーについて学び，身近にある風車の重要性や庄内町の先駆けた取り組みについて再認識するとともに，

有限な資源の節約について思いを新たにする機会となった。

立川中…「自然エネルギーが世界を救う」をテーマに、足利工業大学理事長兼学長の牛山泉氏の講演を実施。旧立川町の風車導入の経緯、風力発電や自然エネルギーの重要性について学んだ。講演後は活発な質疑応答がなされ、生徒の関心の高さがうかがえた。

余目中…「エネルギーとその性質」をテーマに、鶴岡工業高等専門学校名誉教授の丹省一氏の講演会を実施。風力に関する実験、ドン・キホーテの冒険物語を交えたエネルギーの歴史を通して、資源の有限性やエネルギーの重要性について認識を新たにした。

○小学校3校でも下記講師を招聘し、風力発電や再生可能エネルギーについて学んだ。

立川小…鶴岡工業高等専門学校教授 本橋元氏

余一小…東北芸術工科大学教授 三浦秀一氏

余二小…株式会社風の王国代表取締役 山本久博氏

2 総合的学力向上の構想を共有し、確かな学力の土台をつくる

■人間と人間の関わりの中で育ち育てる（人が人をつくる）

<総合的な学力づくり>

○昨年まとめられた『庄内町学力づくりの構想』をもとに、授業づくりを機軸に、家庭・地域と共同した活動を展開し、様々な人との関わりの中で「よりよい生き方・高い志」（総合的学力）を育もうとしている。「人が人をつくる」構想の具体化であり、本町独自の「学び育つ子どもの環境づくり」や「指導のネットワークづくり」が進められている。

○この育成構想を受けて、各校では自校の実情や学区の特色に即し、具体的な授業づくりの工夫がなされ、地域を巻き込んだ独自の教育活動が展開され、子どもたちと家庭・地域社会との豊かで創造的な「関わり」が進められている。

○教委主導で始まった幼稚園、小中学校、公民館、地域団体や地域民一体となった活動が、学区主体の活動・運営に移行されてきている。

◇「立川地域幼・保・小・中・公連携花いっぱい・さわやかあいさつ運動」

・学社連携を深め、地域全体で子供を育てる気運を高めるとともに、地域の活性化にもつなげようというねらいのもと、今年度も運動が展開された。花の苗植えやあいさつ運動を通して世代を超えて自然に交流し、立川地区が一つになった時間となった。

◇「あいさつ運動」

・余二小で「笑顔で元気なあいさつ運動」スタートアップイベントを開催。6年生を中心に、商工会や見回り隊等が児童の登校に合わせて昇降口までの通学路に立ち、あいさつ運動を展開した。6年代表児童のあいさつ運動への意気込み発表、シュプレヒコールが行われ、学区の子どもと大人が一体となった。

○これらの積み上げをもとに、次年度以降の10年間を見据えた本町教育の目指す姿を明らかにし、その実現に向け今後5年間に取り組む重点と主要な施策を示した「庄内町教育振興基本計画」を策定した。家庭・学校(園)・地域・行政が連携した本町独自の子ども育成のシステムがより整理され、明らかになった。

3 子ども一人ひとりの意欲的な学びづくり

■授業像の共有と授業改善

<主体的な学び、学びあいの授業づくり>

- 指導主事二人体制を生かし、主担当校を決めて継続的に指導することにより、具体的な授業改善につなげている。
- 町教育研修所を中核に、教員一人一人の資質や指導力の向上を目指し、教員のニーズや時代的要請に応じた研修を工夫し、継続的・実践的に積み上げている。（「9 教員の資質向上とゆとり創造 研修所の研修と教育課題の連動」に記載）
- 文科省や県教委事業を積極的に受入れ、それを機に目指す授業像を全校で共有しながら、改善への意識付け・意欲付けを図っている。また、指定校として外部指導者を招聘する機会を活用し、研修の充実・推進につなげている。

余一小…『学び合うのが楽しい子どもの育成～「わかる」「できる」喜びを味わう算数の学習ををめざして～』

授業づくりの視点を「学び合う場の設定」と「学んだことがつながる場の設定」に絞り、自校としての課題解決型の学習の流れを確立した。学ぶ必要感のある課題の設定、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりにより、意欲的な学習と課題解決を図った。視点を与えた「振り返り」をすることで、自分の学びの意義や学んだことのよさに気づかせ、更なる学習意欲へつなげた。自主的に家庭学習で取り組んだり、生活場面で生かそうとしたりする子どもが増えている。

余二小…『響き合いながら学ぶ子ども～他者との関わりの中で考え、生み出す～』

三つの視点（1「考えたい」「伝えたい」と思いたくなる単元・場面づくり 2 話し合いの核を明確にした授業づくり 3 話し合いを充実させるための教師のコーディネート力の向上）から授業構想を具体化し、子どもの考えをつなげ、深める実践を積み上げている。

余三小…『自ら学び 伝え合い 確かな学力を培う子どもの育成 一進んで課題に取り組む、学び合い、考えを深める学習活動の充実一』

子どもの考える力を基盤に据えて、四つの視点（1ねらいの設定と課題提示の工夫 2自分なりの考えをもたせる自力解決の工夫 3伝え合い学び合う場の工夫 4振り返りの充実）から、子どもに確かな力をつける授業、一人一人の子どもの考えや思いを生かす授業を求めて改善を進めた。

余四小…庄内町教育研修所研究委嘱『「学ぶ」たのしさ、「わかる」喜びを実感できる授業づくり』

「難しい」「わからない」という児童の声を真摯に受け止め、原点に戻り、「課題づくり」「課題解決」「まとめ・練習」の基本的な学習過程の各段階において児童の実態に即した工夫をすることで、学習意欲を高め、わかるまで粘り強く学習する子どもを育もうという実践研究である。「課題づくり」では、単元レベルの目標設定と構成を構想し、必要感のある導入や算数的活動を取り入れた導入を工夫することで、学習意欲の持続を図った。「課題解決」では、学習内容に応じた学習形態（ペア、グループ等）の工夫、IT機器（書画カメラやデジタル教科書等）を活用した交流場面の工夫により、他と関わり合いながら学ぶ楽しさを感じさせることができた。「まとめ・練習」では、全ての学年で1単位時間ごとに「振り返り」の時間を位置づけ、楽しく取り組み

る「練習」を工夫することで、学習の焦点化と次時の学習との関連化を図った。研究の基底として、QU検査を活かした互いに認め合い話し合える学級づくりを全校で推進した。

立川中…『主体的に学びを拓く生徒の育成 意欲をもって生き生きと学べる授業づくり～課題を解決する力をはぐくむ授業を目指して～』

「主体的に学ぼうとする力」の源を「意欲」と捉え、生徒一人一人が意欲を持てる授業づくりを継続的に積み上げてきた。即ち、「一人一人が達成感をもてる授業」「高め合いのある授業」「自ら気づき、深まりや高まりを感じる授業」づくりである。その成果の上に、「課題を解決する力を高める授業」を構想した。「課題を解決する力」を思考力・判断力・表現力等と捉え、言語活動を基盤とした独自の6つの学習活動を設定し、全校でそれを取り入れた授業づくりを工夫している。全職員共通認識のもと、言語環境を整え、言語活動を充実させた授業づくりを積み上げることにより、課題を解決する力を育むことを図っている。「授業を支える力を育てる日常の取り組み」（チャレンジタイム、ステップアップシートの学級評価など）が生徒主体の学級活動の活動として展開されており、学習に向かう意識向上につながっている。

余目中…『すべての生徒がいきいきと学ぶ授業をめざして』

学びたい・できるようになりたいという欲求を引き出し、わかった・できたという実感が持てる授業を構想し、「学習内容の焦点化」・「授業のユニバーサルデザイン化」・「学びあい活動の推進」の3つの視点で授業づくりを進めた。「学習内容の焦点化」では、単位時間のねらい（この1時間で何を学ぶか）を明確にすることで、生徒の学ぶ意欲を引き出し、多様な学習手段を仕組むことで意欲の持続を図った。また、ねらい（課題＝入り口）とまとめ（振り返り＝出口）の一本化を図ることで、生徒の学びの道筋に一貫性を持たせた。「授業のユニバーサルデザイン化」では、生徒の立場に立ち、生徒の困り感を吸い上げることからスタートし、共通認識を持つに至った。今後は授業像をより具体化しながら、全職員で取り組む事項を明らかにし、本校独自の「余目中スタンダード」を確立しようという構想である。「学びあい活動の推進」では、これまでの研究成果により、授業の中で話し合い活動等が日常的に仕組まれ、主体的な学びを支える基盤がつくられた。その積み上げを生かし、さらに多様な学び合い学習を仕組むことで、より主体的・意欲的な学びを進めようとしている。

<幼、小、中が積極的に関わる授業研究会の充実>

- 町教育研修所の学力向上研究部において、町内各校の授業研究会計画を集約、5月に町内の「校・園内授業（保育）研究会情報」（年間計画一覧）を発信している。これを活用し、年間の見通しを持って一人1回は他校・園の授業参観に出向くことができるよう調整し、参観計画を整えている学校が増えている。
- 幼児・児童理解や教育の連続性、開かれた学校・園づくり等の視点から、学校・園の双方が幼小交流を大事な場と捉え、情報交換のみならず、子ども同士の交流を工夫している。それとともに、教師同士のコミュニケーションも充実してきている。
- 園児・児童の実態から共通する課題を捉え、園・学校の双方で具体的な取り組みを展

開する動きが出ている。

立川小・狩川幼

年間計画に沿って計画的に進められ、質の高い交流がなされている。様々な交流活動が園児の就学への期待感を高めている。関わっている職員双方の連携への意識も高まっている。就学向けて、小学校教員から「椅子の座り方」や「鉛筆の持ち方」について話をしてもらったことにより、園生活の中でも互いに声を掛け合いながら意識して取り組む姿が見られるようになった。

余一小・余一幼

幼稚園の保育研究会には多くの小学校教員が参加。小学校長に儀式的行事以外の各種園行事（運動会、お楽しみ会、コマ回し大会等）にも参加を呼びかけ、園児の成長の連続性を認識する好機としている。今年度より小5児童との交流が2回（プール活動と一日入学）になり、幼児にとって楽しい体験を重ねたことにより、小学校就学へのスムーズな流れがつけられた。

余二小・余二幼

小5児童との交流を重ねたことにより、親しみや安心感が芽生え、4月からの小学校生活への不安軽減、期待感の醸成につながった。当初の計画にはなかったが、小学校教員から「出前授業」をもらい、椅子の座り方や話の聞き方、鉛筆の持ち方等について指導を受けたことにより、就学を意識した生活や活動がなされるようになった。

余三小・余三幼

7月・11月の2回保育参観を実施、多くの小学校教員が参加し、幼稚園教育や子ども理解を深める機会となった。「1年生の授業見学」や小学校教務主任による「出前授業」により、年長児の就学に対する期待に大きな高まりが見られた。幼小連絡会で話題になったメディアに関わる問題を受け止め、幼稚園でも「メディアの約束」の取り組みを実施し始めた。

余四小・余四幼

園側からの申し出により、「姿勢良く座る」「箸・鉛筆を正しく持つ」の2つ共通テーマで幼小ともに取り組みを進めてきた結果、子どもの変容とともに、保護者への意識づけにもつながった。6月に実施した「年長参観日」の中で、小学校教頭による「ミニミニ共育講座」として『小学校生活で大切なこと』について講話を設定し、保護者の意識づけを図ることができた。

- 町教育研修所委嘱の公開研究会では、小中連携の視点で分科会を設定し、小中教員が目指す授業像を共有しながら、具体的な授業改善につなげている。
- 「庄内町算数・数学授業改善研修会」を開催。小学校の算数の提案授業をもとに、「一人一人が楽しくわかる達成感のある授業」を視点到話し合いを行った。また、各校の算数・数学の実践を発表しながら、算数・数学の授業づくりについて情報交換を行い、自校の取り組みに還元している。
- 中学校区を単位とする本町の小中連携システム「立川スタンダード」、「余目アソシエーション」をもとに、学区内の小中の校内授業研究会に相互参加（参観）し、小中教員が課題を共有し解決を図りながら、9年間を見通した学びづくりを推進している。
◇立川スタンダード…昨年度初めて中学校区の小中合同授業研究会を実施。小中全員参加を原則として、中学校での授業研究会・事後研究会が開催された。2年目となる

今年度は小学校で開催し、有意義な研修の機会となった。

■特別支援教育や教育相談の充実と教育支援委員会への移行

<特別支援教育の充実>

- 昨年度までの「就学指導委員会」が「教育支援委員会」と名称を変更した。学校教育法の改正により「教育支援」の文言を用いることとなったが、それは「より早期（小学校就学以前）からの生涯（義務教育修了以降）を通じた教育支援」を意図するものである。その考え方を受け、本町でも町の就学委員会規則を全面改正し、「教育支援」の文言を用いたものである。
- 教委が中心（或いは“仲立ち”）となって、役場関係部署や町内関係機関、外部関係機関等との幅広い情報交換や連携が進められ、就学指導やよりよい指導・支援につながっている。指導主事を中心に幅広くアンテナを張り、子どもを支える支援についての情報を収集し、多様な支援が可能な体制を整えている。
- 課題を有する子どもについては、園や学校に「教育委員会にすぐに相談できる」という安心感や信頼感があり、課題を共有しながら支援できる体制が整えられている。「小さな町」のよさを生かし、これまで積み上げてきた具体的な交流・連携をもとにした本町ならではの支援システムが整い始めている。
- 町教育研修所の特別支援研究部を中核に、特別支援学級のみならず、通常学級在籍で特別な配慮を必要とする子どもへの指導の在り方を探り、支援体制づくりを進めている。
- 今年度は、ユニバーサルデザイン（UD）の視点を取り入れた授業づくり、学級づくりについて、講師による研修や実践校の視察を通して具体的に学んだ。

狩川幼

気になる園児について、教委を介して専門家による指導の機会を多く設けることができた。個々の園児への適切な支援につながった。特別支援学校に通う地域在住の幼児（5歳児）との交流を、年間を通して10回行った。会を重ねるごとに緊張していた表情も和らぎ、互いに溶け込んでいく姿が見られた。就学後も交流が行われる予定である。

余一幼

気になる園児について、教委を介して保育園担当者や保健師等との話し合いの会を設ける等して、適切な支援や問題解決につなげることができた。特別な支援を要する子について、「町気になる子訪問指導事業アドバイザー」を活用し計画的な訪問指導を受けることにより、支援の方向が明確になり、それに沿って指導・支援を進めることができた。

余二幼

気になる子、特別な配慮を要する子について、関係機関との情報連携やアドバイザーの指導・助言により、当該園児理解のポイントや適切な援助について学ぶことができた。それにより、安心して当該園児や保護者に関わることができた。特別な支援が必要な子の個別の指導計画を作成したことにより、問題点や伸びている部分を把握しやすくなり、環境設定や援助の仕方について職員全体で共通理解しながら、支援を進めることができた。

余三幼

障がいがあるかな年長児2名について、指導主事その他機関や保護者との橋渡しにより、スムーズな就学につなげることができた。また、年度途中から受け入れた4歳児について、月2回「はまなし学園」の訪問指導を受けられるようになった。町のアドバイザー等の指導と併せて、安全な環境づくりやルールの明確化等、当該園児のみならず、全ての園児の指導・支援にもつながる研修の機会となった。

余四幼

保護者の希望を受け、教委の仲介により、今年度初めて「サポートセンターあらた」の相談支援専門員による「福祉サービス障害児支援利用計画案」のもと、はまなし学園からの「保育所等訪問支援」を受けることができた。当該園児の集団適応訓練や担当職員への指導をもとに、全職員で話し合い、支援につなげている。

立川小

特別支援教育に関わる支援体制が整っており、特支コーディネーターを中心に組織として動いている。授業研での事後研修の設定や外部指導者の招聘等をもとに、多様な視点から当該児童を捉え、固定化しがちな担任の目線を切り替えたり、アプローチの仕方を工夫したりすることに生かしている。当該児童や保護者の意向を確認した上で、特別支援学級の児童と担任が各学級を回り、関わり方等について説明し協力を求めていくことを行った。子どもたちは真剣に受け止め、交流学习や清掃活動の場面での温かい配慮につながった。児童や教師への情報提供、障がいや当該児童への理解や受容をねらって、特支教室前の掲示を工夫したり、教師に向け便りを発行したりしている。個別の指導計画や評価についての担当者間の話し合いの時間の確保が課題である。(今年度は、関係職員が記述で提出し、特支担当者が集約する形で対応)

余目中

特別支援教育組織を見直し、より計画的な指導と校内連携を進めようとしている。『学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもが楽しく「わかる・できる」ように工夫・配慮された通常学級における授業のデザイン』の考え方に則り、授業のユニバーサルデザイン化を進めている。

- 子どもそれぞれの障がいから生じる困難さ(障がいの特徴)を踏まえながら、その困難さを軽減していく指導・支援が求められる。一人一人の学習状況や教育的ニーズをしっかりと見極め、個別性の高い適切な指導を検討していくことが必要である。また、学習しやすい環境づくりに配慮することも求められている。活動内容と活動場所を対応させる、学習の流れや展開を視覚的に提示する、活動の順番や作業の手順をわかりやすくする等の配慮に、学校全体で組織的に取り組む必要がある。
- 学級経営・不登校を減らす学校経営体制づくり

<教育相談の充実>

○教育相談専門員、教育相談員配置事業の活用

立川中に1名の教育相談員(県・町兼務)、余目中に1名の教育相談員(県)及び教育相談専門員1名(町)を配置。人的環境づくりという観点から教育相談体制が整備されている。

教育相談室では年2回、教育相談専門員と教育相談員の合同研修会を実施し、事例研究等を進めている。また、幼小中の連携を意図して個人カルテを作成・整備し、活用を図っている。

○教育相談体制「ほっと相談体制」の定着

余目中の教育相談室に「ほっとルーム」が開設されて3年目。町教育相談専門員が常駐し、生徒は休憩時間等に自由に来室。生徒の心の開放や悩みへの早期対応等に機能している。

町内全園・小中校を対象に、園は年1回、小中校は年2回の定期訪問を実施。中学校の不登校の現状等を伝えながら、中学校単独の問題ではないという認識のもと、未然防止のための根源的な対策（各発達段階でなすべきこと、仲間づくり、自己決定の場を増やす等々）について共通の意識づけを図っている。

○教育相談員とSC、教職員の連携（中学校）

余目中…「新たな不登校を出さない」ことを学校全体の課題とし、学級担任・養護教諭・相談員との連携を強化。校長の主導で専門員も職員会議に参加する体制をつくり、情報を交換・共有することでよりの確な対応が検討され、全校体制で取り組んだ結果、不登校生徒数が減少した。

（不登校出現率 小学校：0% 中学校：1.6%）

○校内相談体制の充実

立川小…学校全体で話し合える雰囲気があり、全体の問題として取り組んでいく体制ができている。情報の交換・共有がきちんとなされており、担任以外の教員も校内全ての子どもを把握している。必要に応じて予定外のケース会議も開催され、「担任が一人で抱え込まない」体制づくり、学校経営がなされている。

<小中連携の推進 小6・中1・中2連携プロジェクトの活用>

○「立川スタンダード」では、1小学校、1中学校、校舎隣接という好条件を生かし、予想される課題を共有し、共に解決しながら、学制の枠を超えて義務教育9年間を見通した教育活動を推進している。小中それぞれの特性・独自性を尊重しながら、相互に学校経営を開き、必要なものを精選して連携活動を推進・充実させている。小中合同授業研究会を開催。立川小の授業研究会に立川中の全教職員が参加、事後研究会も合同で行った。立川小児童が全員立川中に入学してくるというメリットを最大限に生かすために、小中教員が共に児童生徒を見ていくことの重要性が再認識された。毎年度継続してQUアンケート、NRT、月曆の交換を行い、活用している。小6の体験授業については、児童の状況や担任の意向を受けて教科を決定、今年度は理科を実施した。小中合同の教職員歓送迎会、「花いっぱい・さわやかあいさつ運動」も継続実施。総合的な学習の時間における「地域に関する学習」について、小中で落ちや重なりを確認しながら、調整を図っている。

○「余目アソシエーション」では、中学校の実態を踏まえ、それぞれの学校の特色を生かしながら、小・中が一貫して中学校区の児童生徒の力を育むことを目指して、児童生徒の交流と教員の交流を推進している。

【行事見学】

6年生と保護者が中学校の行事（地区総体壮行式・県中総体壮行式・生徒会役員選挙から小学校が選択）を見学し、生徒の活動を中心に中学校生活への理解を深めている。自発的に体育祭や文化祭を見学する小学生も多い。

【体験授業】

今年度は6年生が中学校に出向き、中学校の教員が授業を行う形で実施。国語・社会・英語・保健体育・技術の中から各小学校が2つずつ選択し、児童に体験させることにより、中学校の学習内容や授業の進め方を感得させている。

【職場体験】

中学生が各小学校で職場体験学習をさせてもらう。小学校の受入れ準備が整っており、中学生にとって楽しく貴重な体験学習となっている。

■育成システムの充実

＜算数のデジタル教科書の導入＞

（「9 教員の資質向上とゆとり創造 研修所の研修と教育課題の連動」に記載）

＜小学校文化交流会＞

○教委の主導により、町内各小学校の5年児童が響ホールに集い、音楽活動による初めての「文化交流会」が開かれた。これまで陸上競技大会での交流はあったが、さらに文化面での交流を通して学びを開き合い、高め合うことを目指して開催されたものである。合唱や合奏、ソーラン節等自校の活動の成果を披露し合い、互いのがんばりを称え認め合う貴重な機会となった。また、他校のよさや頑張りが刺激となり、意欲を高める機会ともなった。

○同学年の児童が一堂に会し、全員合唱等を体験する中で、多くの同じ町の仲間がいるということを実感的に受け止め、新たな体験に積極的チャレンジし、新たな友情を育もうという気持ちを高めることができた。

4 庄内町の気候風土、自然、社会、文化を学び、豊かな心を育む計画的な体験

■交流の中で助け合い、支え合い等の社会力を育む

＜障がい理解と包括教育の推進＞

○保護者の希望を受け入れて、特別支援学級に在籍する子どもも可能な限り親学級で学習している。親学級の子どもたちも当然のこととして受け入れ、日常的に自然な交流が図られている。

○障がいのある子どもたちと町ボランティアサークルの中高生らとの交流が積み重ねられている。自らも交流を楽しみながら、子どもの状況に応じて遊びの内容や関わり方を工夫する姿が見られる。

■自然・社会体験活動・子どもたちが地域の一員として役割をはたすボランティア体験の充実

＜異世代との交流体験＞

＜自然・社会体験活動＞

＜地域の一員として役割をはたすボランティア活動＞

○多くの園・学校で福祉施設の訪問・交流活動を教育課程に位置づけながら、独自の多様な活動を展開している。それらの体験を通して、多様な人の存在を認識し、関わり方を学び、地域の一員としてできることを考えながら、自己の生き方を見つめる機会としている。また、子どもなりに、自分たちの活動や存在が喜んでもらえた、人の役に立ったという自覚が得られ、自己の存在を肯定的に捉える好機ともなっている。

○園・学校共に地域の風土や文化に触れる多様な活動が企画され、地域のよさを感じ得る機会となっている。人との関わりを深めながら、子どもたちに「地域の人から温かく育てられている」という実感をもたらすものになっている。また、子どもなりに、自分たちの活動や存在が喜んでもらえた、人の役に立ったという自覚が得られ、自己の存在を肯定的に捉える好機ともなっている。

○地域や教委の求めに応じるというだけでなく、学校としてその意義や教育的効果を実感したことにより、多様な要素が盛り込まれ、より豊かな学習が展開されている。

狩川幼…隣接する小中学校や保育園、公民館、地域とのつながりを大事にしながら、よりよい体験活動、幅広い体験活動を工夫し、子どもの成長につなげている。「花いっぱい・さわやかあいさつ運動」はじめ、多くの人と関わりながら行う活動を大切にしている。

余一幼…地域の人々との多様な交流や自然や文化との出会いをもとに、町の良さを感じ得る豊富なプログラムを作成している。かがり火祭りへの参加、施設訪問など、触れ合いを通して地域に親しみを寄せたり、人のために何かをする喜びを感じたりする活動を重視し、意図的に取り入れている。

余二幼…週1回、業務員の手伝いという形で、自分たちの手で過ごしやすい環境づくりをする体験を重ねた。さらに、散歩や園外保育の際にゴミ拾いなどの美化活動を行うことで、地域の環境を意識する気持ちが高まった。地区公民館活動への参加や祖父母参観日での高齢者との交流、施設訪問（ラ・ルーナ）等地域の様々な人との交流を通して、「役に立っている」「喜んでもらえた」という自覚が得られた。

余三幼…「地域とのかかわり」を重点として取り上げ、4つのボランティア（畑・一緒に歩こう・クッキング・絵本）を呼びかけ、多くの保護者や祖父母の参加が得られた。核家族が増えている中、家族以外の大人と直に触れ合ういい機会となった。また、地域民が園児を「地域の子ども」として認識してくれることにもつながった。

余四幼…余四公主催の高齢者研修事業「和合大学院」や、社会福祉協議会主催の「高齢者世帯とのさわやかふれあいの集い」、畑の先生や昔話のおじさん、ザリガニのおじさん等々の多様な交流活動を積み重ねることで、園児らは地域のお年寄りに可愛がられるということを実感的に感じ取っている。また、温かい交流の中で、自分の思いを伝えることの大切さや、相手の気持ちを思いやることの大切さにも気づき始めている。

立川小…毎年、立川ホテル研究会の指導のもと、5年生が前年から世話をした育てた幼虫を、4・5年生が二俣農村公園内の小川に放流。夏の鑑賞会でホテルの飛び交う姿を思い描きながら、ホテルの里づくりに一役かっているという自覚が高まっている。

余三小…庄内総合高校の「地域に開かれた学校づくり」に、近隣校として余三小が協力し、「連携授業」を開催。指導する・される双方が学ぶことが多く、共に楽しみながら交流を深めている。今年度は3年児童37名が庄総生の指導を受けながら、ヴォーテックスフットボールを使った投てきや鉄棒の前まわり・逆上がりに挑戦した。他に商業や英語学習を実施、普段体験できない学習の面白さを味わう機会となった。

立川中…1年生が総合学習で、サクラマス生態について学んだ後、稚魚の放流を行った。また、三ヶ所に分かれて立谷沢川の水質調査と水生生物調査を行い、身近な立谷沢川のすばらしさを再認識するとともに、きれいな川の保全への意識を高めた。

5 地域の学校としての特色ある学校づくりのマネジメント推進

■施設・行事を活用した教育活動の推進

<社会科副読本による教科書の庄内町化―単元展開の作成>

小5「庄内平野の米づくりの工夫と亀ノ尾」

小6「太平洋戦争と幸徳中将」

○昨年度作成された実践事例を盛り込んだ増補版を重点的に活用しながら、社会科副読本『わたしたちの庄内町』の活用を進めている学校が多い。また、学区の特色（自然、人材、伝統芸能、行事等）を生かしながら「学習や教材の庄内町化」を工夫している学校が多くある。実践した授業や単元の記録を残し、集積している学校がある。

■地域力を積極的に活用し、教育の質の向上に努める

<学校と家庭、公民館、地域の連携を強化>

○望ましい子どもの育成には、学校内外の大人が連携・協働して関わる仕組みづくりが必要との共通認識のもと、町をあげて具体的な連携活動を推進している。

○「地域に生きる」「地域を担う」という視点から子どもを育んでいこうという共通認識のもと、学校・園と家庭、地域、公民館が連携することにより、他市町に類を見ない心に響く豊かな体験活動やふるさと学習の充実が図られ、継続的に展開されている。子どもたちのふるさとに対する誇りと愛着の心を育むことにつながっているという手ごたえが得られている。

○子ども像や教育理念を共有し、学校や地域の特性を生かしながら、学校と地区公民館、地域団体、保護者や地域住民が一体となった活動を展開し、学校を支える教育環境づくりや「地域と共につくる学校」を推進している。教育に参画することで地域の活性化も図られ、新たな地域づくりにつながることを、関係機関の皆が認識し始めている。

○町内各校・園の管理職が、「地域の学校」という視点を機軸にした明確な経営方針と経営戦略を持ち、P（計画）・D（実行）・C（評価）・A（修正・是正の働きかけ）サイクルに立脚した堅実な学校運営、「特色ある学校づくり」を進めている。教育委員会は、各校・園の主体的・自律的な動きを積極的に支援している。

●地域のよさを生かした教育活動や交流活動は、子どもの心の成長に大きな成果をもたらす反面、子どもや校務の多忙化に拍車をかける懸念をはらんでいることを認識したい。重点化・焦点化しながら、子どもたちが一つのことにじっくり取り組めるよう配慮することも必要である。授業時数の確保とともに、精選を検討したい。

<学校支援地域本部事業・放課後子供教室の活用>

―学校支援地域本部事業（小学校）―

○小学校では、各校に配置されている地域コーディネーターが核となり、地域と連携した図書館活動を推進している。学校の図書主任と連携しながら、学習活動の充実につながる図書館環境づくりや読書推進活動を行うとともに、地域ボランティアを募って、

読み聞かせや図書館の環境整備活動を進めている。事業開始から5年を経て活動も年々定着・充実しており、この庄内町方式は学校・地域連携事業の一つのモデルと言えよう。

- 平成27年度の「全国学力学習状況調査」の結果、「読書が好き・どちらかといえば好き」の割合は全国・県より高い数値（78.1%）を示している。また、「週に1回以上図書館に行く」子供の割合は、全国の3倍、県の2倍に当たる高い数値（53.1%）を示している。より主体的な読み手を育てること、読書の質の向上と学習に役立つ図書館づくりをさらに進めたい。

—放課後子供教室（小学校）—

- 地域民の手による放課後の子ども達の居場所づくりとして、立川小学校の児童を対象に今年度からスタート。コーディネーターを中心に、募集した地域民による「活動サポーター」と共に、5月から3月まで年間を通し多様な体験（スポーツ、音楽、ものづくり、英語等）を設定し、子ども達の活動を支えた。
- 事業を通して、学校と教委、地域住民、公民館、学童保育等との連携・協働の在り方が模索され、それぞれの役割を再認識する機会となった。「教育を支える地域づくり」「子どもを育む地域の体制づくり」に向けて、着実な一歩を踏み出している。

◇狩川小学校区の「青空広場」

活動スローガン「あいさつ・なかよし・チャレンジ」のもと、町内外の指導者を招聘し、ギター教室、英語教室、パソコン教室、クラフト教室、凧づくり、ふきこまづくり、すごろくづくり、グランドゴルフ、サッカー、フラフープ等々の多彩な活動が展開された。

100人近い子どもの参加申し込みがあり、多様な活動を楽しみに参加する児童が多かった。

一方で、開放感から日常の学校生活でのルールが守れず、問題となる行動（指示が聞けない、

公共の施設や道具を粗末に扱う等）も一時見られたが、学校や関係機関のサポート（担任の援護指導や「学校づくり懇談会」での取り上げ、学童保育担当者との打合せの設定等）を得ながら、協働して子どもの意識を高め、改善を図った。地域の大人がまとまること、同一方向で子供を育むことへの認識が高まった。

—学校支援地域本部事業（中学校）—

- 中学校では学習分野で本事業を活用し、3年生を対象に進路実現に向けた土曜日学習会「夢サポート塾」を開催。教員OBや大学生、地域住民による学習支援を行った。
- 今年度は、2中学校の状況に即して、立川中学校区、余目中学校区それぞれで塾を開催した。両区ともに真剣且つ意欲的に学ぶ生徒の姿が見られ、以下の多くの成果が得られた。
 - ①地理的要因や交通手段から近隣市への通塾が困難な状況の改善を図り、学校以外の学びの場をつくることで、学習の充実や成績向上に寄与することができた。（立川）
 - ②9月からの定期的な塾の開催により、部活動引退後の生徒がいち早く気持ちを切り替え、受験勉強に向かうきっかけや弾みになった。また、土曜日は集中して勉強する日という認識を持ち、習慣化が図られた。（立川・余目）
 - ③講座後に質問に来る生徒、自分の問題集を持ち込んで聞きにくる生徒、実力テストの結果をもとに対策を相談に来る生徒等が次第に増え、受験生としての主体性や学

習意欲が高まった。(立川・余目)

④経済的に困難を抱える生徒，不登校傾向の生徒，一斉指導では意欲を持ちにくい生徒の支援に大きな成果があった。数・英に複数のコースを設け，希望選択制で個に応じた学習を行うことで，生徒の意欲や学力の向上につながった。(立川) また，別室登校の生徒に塾でも別室対応し，勉強を介して大学生や地域の人と接することで心が開くきっかけとなり，自信が芽生え，学校生活にも改善が見られた。(余目)

⑤広報で募集したところ2名の地域在住者が講師を務めてくれたが，都内から移住して間もない状況の中，「塾の仕事を通して地域に馴染むことができた」と語った。地域が学校を支えるとともに，教育に参画し子どもたちと関わりあうことで地域民の有用感・充足感を図り，地域を活性化することにもつながっていることが実感された。(余目)

⑥多くの一般町民が来館する地区公民館を会場にしたことで，生徒の真剣に学ぶ姿や入退館時の感謝の気持ちをもって挨拶する姿を見て，公民館スタッフや地区民の中学生に対する評価が高まった。そのまなざしや配慮が生徒に反映し，「地域の人々から温かく見守られている」という認識が育った。町で目指す「地域社会が一体となり，教育を支える地域づくり」につながった。(立川・余目)

⑦コーディネーターが毎回発行する連絡表を通して，学校と塾との連携体制がつけられた。また，学校と家庭と塾の橋渡しとなり，信頼関係の一助となった。(立川)

⑧東北公益文化大学の協力により，学生6名が講師として参加。より身近な大人と接することでこ

れからの学生生活や将来について進路意識が広がり，社会性を高める機会となった。また，学生にとっても，実力派スタッフの教科指導法や生徒とのコミュニケーションの取り方を学ぶ機会，生徒を第一義に考え対応する教員としての在り方を学ぶ機会となり，「若手育成」にもつながった。(立川・余目)

○教育委員会職員も講師として年間を通して支援した他，教育長はじめ関係職員が頻繁に顔を出し，学習の様子を見守り，温かい声掛けをした。それらの自然な交流を通して生徒にも，生徒を介して保護者にも，教委に対する親しみと信頼感が増した。

6 人間性の基礎を培う幼児教育の強化

■カリキュラムづくりへの支援

<楽しい遊びづくり>

○子どもが夢中になり楽しいと感じながら様々な運動を経験できる運動遊びを工夫・実践し，楽しみながら体を動かす環境構成や援助について探った園がある。(余一幼)

○「思い切り心と体を動かし，『遊び込む』楽しさを味わう」園児の姿を目指して，環境構成の工夫や教師の援助の在り方について研究を進めた園がある。(余四幼)

○友達と遊ぶ中で相手の思いに気づき，思いやりながら遊びを進めることができる環境構成や援助を探りながら，人との「かかわり」を通して共に育ち合う姿について研究を進めた園がある。(狩川幼)

<言葉で伝える活動の重視>

○「言葉」に焦点を当て，伝え合いを楽しむための環境構成と豊かな言葉を育むための手立てについて研究を進めた園がある。(余二幼)

○友達とかかわって熱中して遊べる環境構成や援助の在り方を探り、また、友達とかかわって遊ぶことで、思いやりや相手を受容する心を育み、思いを言葉にして伝えられる力を育もうと研究した園がある。(余三幼)

<伝承的遊び等自立の礎を育む活動の充実>

○地域住民を講師にした伝承遊び、地域の特色あるものづくり体験、栽培・収穫活動等の様々な活動を通して、地域の自然や文化のよさを実感している。地域への視点が広がり、思いが深まった。

<大人と積極的に関わる活動の充実>

○どの園においても、地域住民との交流活動が年々拡充してきており、地域に根ざした豊かな体験活動が展開されている。地域の子どもという認識で、地域ぐるみで子どもを育てようという気運が高まってきている。

7 命を育む教育活動の充実と推進

■共に命をつなぎ合う社会、いじめを絶対許さない土壌づくり

<いじめ深刻化を防ぐ学校組織としての早期対応>

○いじめアンケートを実施する際に、その前後の児童の行動を多くの職員が目で見、担任が気づかないところを見取ったり気遣ったりする体制が自然発生的にできている学校がある。多くの目で見ることによって学級の実態や課題が明らかになり、共に解決していく、育てていくという認識で対応している学校がある。

○子どもの問題が顕在化してきた段階で、時期を逃さず話し合い、組織で対応しようとする学校が多い。即時の話し合いができない場合には、「用件メモ」で概要を伝え合い、共通認識を図ることに留意している学校がある。

○情報が伝わらないことが問題の根源という考えのもと、管理職主導で隔週で教育相談員と学年主任を集めて情報交換するシステムをつくり、問題の把握と共有化、組織としての早期対応を進めている学校がある。

●せっかくの組織がうまく機能せず、相談員によるメンタルチェックや面談等も活用されないまま、全校的な取り組みができにくい場面がある。組織として対応する校内体制づくりを再度見直す必要がある。

●外部指導者や地域住民に「いじめは学校の問題」という固定化した認識があるが、スポ少や公民館活動、学童保育など学校外活動でもいじめが発生している現実がある。「いじめはどの子どもにもどこでも起こりうる」という認識で、地域全体の問題として受け止め、学校、家庭、地域、行政が一体となって対応していくことが求められている。

<「いじめ防止基本方針」の活用>

○町内各小中学校では「いじめを許さない学校づくりの推進」の共通目標・共通実践に向けて、昨年度『いじめ防止基本方針』を作成、組織でいじめに対応しようと努力している。今年度は、本町の特性を生かしたいじめ防止、早期発見・早期対応のための対策を町民全体で推進すべく、『庄内町いじめ防止基本方針』を策定した。「いじめを

許さない・見逃さない」という共通認識で、共に生きる他者を尊重する生き方の育成を目指し、町をあげて防止対策に取り組もうとしている。

8 地域社会を支え、国際社会感覚のある人材の育成

■中高生の海外研修の推進

<青少年海外研修事業「マレーシア研修」>

○昨年度に引き続き、5泊6日のマレーシア研修を実施。森林資源豊かなコタキナバルを訪問し、

異国での自然体験や交流活動を通して、現地の人々の生活や環境保全について学ぶとともに、自分の住まいするふるさとの未来や自然との共生について考えることをねらっている。子どもの目と心を開く世界への窓、ふるさとへの窓として本事業が位置づけられている。

○庄内町中学生、県立高校生、国立高専生15名が参加。異年齢の研修生同士の関わりや引率協力者や現地の人々との交流を通して、自ら積極的に他者と関わろうとする姿勢が出てきた。また、現地での生活や文化に触れることで自国や地元地域のよさを再認識し、将来の就労や生き方を考える貴重な機会ともなった。

○自分が育った地域の伝統や生活文化に誇りを持つと同時に、他国の伝統や文化を認識し敬意を持つことが、グローバル時代を生きる子どもたちに求められる力の両輪である。自身の芯となる基盤を持つことがグローバルに通用する基本であり、そのためにも、地域の中で子どもたちが温かく支えられ与えられるだけでなく、地域の一員として役割を果たし、伝統や文化の担い手として育っていく場面づくり、仕組みづくりが重要になってくる。幸いなことに本町では、幼稚園・小中学校の各段階で地域の自然や文化、人材に触れる機会が設定され、地域のよさを感得する豊富な体験活動が展開されている。その学習を積極的に生かし、海外研修に臨むことが期待されよう。

9 教員の資質向上とゆとり創造

■研修所の研修と教育課題の連動

■ゆとり創造

<所員研修会、所員交流会の開催>

○昨年度までの6つの専門部会を4つに改編し、所員の負担軽減を図るとともに、幼・小・中・公の職員が枠を超えて課題を共有し、研修・実践交流を進めることで、一貫教育の視点が強化され、相互のネットワークづくりが図られてきている。

○町の子どもの実態や課題と教職員のニーズをすり合わせながら、実効性のある研修を企画、実践しながら、自校・園・公の日々の実践につなげている。

○7月最終金曜日（今年度は7月）31日を全町内「学校閉庁日」とし、全職員の終日研修日として位置づけ、研修参加を保障している。教育講演会、課題別研修会を開催、その後に所員交流会を実施。

事務局

○年2回「担任力向上研修会」を開催。教員の課題やニーズに対応し内容が工夫され、各校の授業改善・向上につながる継続的な研修の機会となっている。今年度は、集団づくり、授業づくりの視点から研修が企画された。

○第1回研修会…「自尊感情と自浄力を育てる集団づくり」

- ・ 國學院大學 杉田洋教授による講演
- ・ 中学校は悉皆研修，小学校は各校任意参加の形で実施。160名の参加を得て，集団づくりの大切さ学んだ。
- 第2回研修会…「一人一人が楽しくわかる授業づくり」
 - ・ 筑波大附属小学校教諭 桂 聖 氏による教員を生徒に見立てた模擬授業と講演
 - ・ 小学校は悉皆研修，中学校は各校任意参加の形で実施。150名の参加を得て，ユニバーサルデザインの授業づくりを学んだ。

学力向上研修部

- 5月に町内の「校・園内授業（保育）研究会情報」（年間計画一覧）を発行。これを活用し，年間の見通しを持って，一人1回は他校・園の授業参観に出向くことができるよう校内の参観計画を整えている学校が増えている。
- 「庄内町算数・数学授業改善研修会」の開催協力。
 - 立川小3年生の算数の提案授業（TT授業）をもとに，「一人一人が楽しくわかる達成感のある授業」を視点に，協議・情報交換を行った。
 - 昨年度に引き続き，数学教育実践研究会（小金井市立第三小学校教諭）の森川みや子氏の講話「みつける・つくる算数～量と測定編～」をもとに研修を深め，自校の授業改善へつなげる有意義な機会となった。
- 「全国学力・学習状況調査」の町全体と各校の考察と対策について意見交換を行い，共通実践を検討するとともに，自校の取り組みに還元する機会としている。
- 「一人一人の学力を向上させるための家庭学習の仕方：各学校の成果と課題」をテーマに，具体的に情報交換，意見交換を行った。自校の取り組みに活かすとともに，町内の小小連携，小中連携を進め，改善の手立てを講じている。

特別支援教育研修部

- 「通常学級で気になる子に対するユニバーサルデザインの視点による指導法や特別支援教育力の育成」をテーマに，年3回の研修会を企画・実施。
- 第1回研修会…「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」
 - ・ 県教育センターの外山指導主事の講話の伝達研修
 - ・ 県教育センターのハンドブックやリーフレットを活用し，UDの視点による基本的な授業づくり，学級づくりについて研修
- 第2回研修会…「高等学校における発達障害のある生徒のためのキャリア教育～全体から個までの支援態勢づくり～」
 - ・ 元県立山添高等学校長 齋藤和久氏の講話をもとに，下記について研修。
 - ・ 特別な支援を必要とする生徒への指導の在り方（全体指導，個別の配慮，個別の指導）
 - ・ アカデミックスキル（教室環境のUD化，授業のUD化，学校設定教科の実施）
 - ・ ソーシャルスキルの育成
- 第3回研修会…「遊佐町立高瀬小学校におけるユニバーサルデザインの実践に学ぶ」
 - ・ 実践校高瀬小学校の視察研修（UDの視点を生かした教室環境，校内掲示，施設設備等）
 - ・ 当該小学校長 歌川裕氏の講話（UDの考え方，共通実践事項，研究内容，児童の状況等）

情報教育研修部

- 情報教育に関わる教員の資質向上を図ることを重点課題とし，IC機器の有効活用と

児童生徒の情報リテラシー育成の2つの観点から研修を積み上げている。

○情報教育研修会①…「デジタル教科書の効果的な活用の仕方」

東京書籍ICT事業部課長 中島国太郎氏を講師に、今年度小学校4年生以上に導入されたデジタル教科書の使い方について、実際のPC画面で操作しながら実技研修

○情報教育研修会②…「授業におけるデジタル教科書の活用について」

余三小の高宮勤教諭による4年生算数「どのように変わるか調べよう」の提案授業を基にした研修

○課題別研修会…PCスキルアップ研修会「ICT活用教育支援ソフト『SKYメニュー』の使い方」

PC室をより活用しやすくするため、ICT活用教育支援ソフト「SKYメニュー」の使い方についての講義と実習

- ネットトラブルの潜在化を踏まえ、その現状と情報モラル教育について、当該部員や研修会参加者を核にした伝達講習を実施するなどして自校内での認識の共有化を進めるとともに、所員の全員研修或いは各校での親子研修等へ拡大を図っていく必要がある。

児童会・生徒会活動研修部

○子どもの自尊感情や自治力の向上を目指し、児童会・生徒会活動等の集団づくりに関する指導法を重点課題とし研修を積み上げている。

○リーダー研修会…6月に立川中を会場に開催。

余目中生徒会の南三陸町支援（ボランティア交流）についての発表をもとに、各校リーダーのボランティアに対する意識が大きく高まった。各校が南三陸町へのボランティア活動に取り組むことを全会一致で決定することとなった。

「いじめ撲滅」に向けた「言の葉」運動の模擬体験活動を実施。町全体の共通の取り組みの一つの指針となった。

○リーダー研修会において小中混合グループを編成したことにより、小学生は中学生のレベルの高さに学び、中学生は調整力や運営力を学ぶ機会となった。

○他校のリーダーと交流することが大きな刺激となっている。参加したリーダーらの意識の高揚と成長の機会として、根付いている。彼らがオピニオンリーダーとしてより積極的に発信し、自校の活動を主導していくこと、さらには町全体の共通実践への大きなうねりとなっていくことが期待される。

町教育研修所課題別研修会

○所員の研修希望をアンケート調査し、研修所の重点等とすり合わせながら、希望の多い内容を中心に企画。所員のニーズに対応した研修意欲の高い講座となっている。

- ・合唱・学級経営講座 「合唱づくりは学級づくり～合唱を通してクラスを育てる～」
- ・町内めぐり講座 「町内巡り+授業づくり講座～立川地域を教材化しながら～」
- ・情報教育講座 「PCスキルアップ研修会～デジタル教科書～」
- ・教科指導法講座① 「体育指導法研修会～体づくり、感覚づくり指導について～」
- ・教科指導法講座② 「国語指導法研修会～単元を貫く言語活動を取り入れた授業づくり～」
- ・体づくり講座 「ダンスで表現～Jポップに合わせて～」
- ・特別活動指導法講座 「友好町との交流を通じて、人のために働く人を育てる」
- ・学校事務部会 「事務処理データの共有作業」

- ・業務員・調理員部会「視察研修～朝日中学校・朝暘第四小学校・はらぺこファーム・鶴岡市学校給食センター」

町教育研修所教育講演会

「子どもと大人の社会力育てが学校と地域を救う」

講師 茨城県美浦村教育長 門脇厚司 氏

- ・町内外から約250名が参加。
- ・多くの大人が子どもたちに関わる機会を意図的に仕組むことの必要性を学んだ。

10 学校教育施策・事業の総括

- (1) 一貫して「つながる」ことへベクトルを向け、学校・園、家庭、地域がそれぞれ何ができるのか、果たすべき役割は何かを考えながら、子どもを支える緩やかなネットワークづくりを構想・推進している。毎年度の『教育委員会の重点と視座』の文言にそれが如実に表れている。「地域力（自然，文化，人材）を活かした教育活動」「地域と共につくる学校」「共育の推進」「地域社会が一体となり，教育を支える地域づくり」「関わりの中で育ち育てる」「交流の中で助け合い，支え合いの社会力を育む」「学び合いの授業づくり」等々。この揺るがぬ教育観が，各校や園の共通認識を生み，重点や経営に反映されるとともに，本町ならではの特色ある豊かな教育実践につながった。また，この考え方が次第に地域に浸透し，積極的に学校教育に関わることで，地域の活性化も図られた。
- (2) 子どもの「気になる行動」の背景や要因には，学校生活だけでなく，子どもを取り巻く様々な生活環境が複雑に影響していることが多い。学校だけでは対応が困難な事例が多くあり，教育機関や福祉機関，医療機関，その他の多くの関係機関と連携協働していく必要がある。指導主事を中心に幅広くアンテナを張り巡らしながら各関係機関の存在を把握し，それぞれの業務内容や実情を掌握し，面識を深める努力を重ねている。さらに，それぞれの専門性を尊重し，その機関が「できる」ことに着目して，具体的な役割分担を明確にしていくことが重要である。本町教育委員会はその中核的な役割を担っている。
- (3) 小規模自治体の特性を生かし，常に町保健福祉課と情報交換を行い，事例相談等があった時にはいつでも行動連携がとれるような体制を整えている。さらに他の外部関係機関につなげる必要が生じた場合には保健福祉課の情報を取り込み，スムーズに連絡が取れるよう配慮している。それがより迅速な対応を可能にし，問題発生 of 未然防止や問題の深刻化の防止にも役立っている。この体制を拡大・発展させながら，生まれてから義務教育修了以降までの「途切れのない支援」体制を構築していくことは望めないであろうか。
- (4) 自信（自己肯定感）と意欲と周囲への信頼感を持って共に生きようとする—そのような育ちは，幼児期から学童期，そして思春期まで途切れることのない連続性を持った育てる営みによって初めて可能になる。本町の幼小連携，小中連携システム（立川SD・余目AA）はそれを可能にするものである。長期スパンの視点でその意義を再認識させ，実効性のある実践活動の工夫を指導したい。
- (5) 教育委員会が打ち出す重点施策と，それを受け止めながら直接子どもたちの指導に携わっている教育現場との間にはギャップが生まれがちだが，教委主導と学校裁量とのよきバランスにより，本町では教育行政と学校・園との望ましい関係が築かれている。

中 里 健

1 はじめに

平成27年度の原田町長の町政談話を読むと、「本町の将来像・自然はみんなのエネルギーいきいき元気な田園タウンのもと、生きがいつくり、人づくり、オンリー1の町づくり」であったものが、合併10年の実績効果を踏まえつつ、国の地方創生支援をにらみつつ、町の将来像に少しずつ変容を読み取れる。平成27年度は「日本一住みやすく住み続けたい町」の「実現から発展」に向けてのスタートの年とし、町民の「参画」と「協働」を基本とし、将来「自立し、継続できる町」への挑戦を続けると表明しています。

確かに庄内町の他に誇れる特色は、自然が豊かで、7割の方が住みやすいまちで満足といい、そこに住む人たちが、優しいということです。(町民・中学生のアンケートより)

町長の町政への姿勢はおおいに賛同できる。住民意識の理解はもちろん、合併10年の実績は目を見張るものがある。新産業創造館「クラッセ」、ギャラリー温泉「町湯」のオープン、月山山頂の町となった。響ホール、八幡スポーツ公園の充実、月の沢温泉北月山荘リニューアル、全国一番先に造った風力発電の町、風車村、ウインドーム、雪室、木質バイオマス、などと既存の施設を加えて、まさに創生への新たなスタートの年にふさわしいと実感できる。

それに伴う、三つの重点プログラムに取り組んでいるのも素晴らしい。

プロジェクト1 子供どもを安心して産み育てられるまちづくり

プロジェクト2 高齢者の、とびっきり元気なまちづくり

プロジェクト3 農、商、工が一体となった活気あるまちづくり

少子化、高齢化、産業、経済の活性化は、全国的な現在の課題となっている。庄内町は独自の方策でこの三つの課題に挑戦している。例を挙げれば、ランドセルの贈呈、保育園の民営化、高校生への支援、がん検診の無料化、プール、温泉の整備、後継者育成事業、一店逸品運動、たべぶらパスポート事業などがある。

社会教育では、これら庄内町が進める施策に基づいて、次の三つを基本方針としている。「個性を伸ばせる教育環境の整備」「生涯をとおした学びとスポーツの推進」「町民の手による文化創造の推進」

「第6期中教審生涯教育分科会」は、社会教育推進の基本的な考え方として、地域における学習を活力あるコミュニティ形成・絆づくりに積極的に貢献できるものとすることや、社会教育行政が地域の多様な主体とより積極的に連携・協働して取り組みを進めていく「社会教育行政の再構築」を実施するための環境整備を図ることが重要と示されました。

また、平成25年度からは、地域社会における様々な現代的課題に対し、公民館等が関係諸機関と連携・協働し、課題解決に向けて実施する地域独自の取り組みを支援するため、「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」を実施した。このような取り組みによって社会教育を活性化することを通じて、地域の絆、地域コミュニティの再生及び地域活性化を図り、元気な日本を取り戻すことを目指している。

文科省白書も、項目によっては、内容が理解困難なものも散見されるが、生涯学習社会の実現のためには、「学びの場を拠点にした地域コミュニティ形成の推進」「互助・共助に

よる活力あるコミュニティの形成」を目指していることは理解できた。

これは、庄内町の教育委員会のこれからの行政方針と方向を同じにしている。町長部局の中でも関係する部局、関係機関が、公民館等の社会教育施設を拠点に連携・協働しつつ、「町づくり」「地域づくり」「人づくり」の三つの要点を一体にして、具現化を目指そうとしている。

2 庄内町らしい社会教育の効果的な施設と組織体制づくり

・庄内町らしいものを挙げるとすると、次のようなものがある。

- ①七つある公民館が、社会教育の中核拠点としての各種事業の展開、右倣えでないオンリー1の内容になっている。
- ②社会教育には、社会教育委員会、運営委員会、協議会、審議会、推進委員会等がそれぞれの関係施設にあって組織されている。数年前から、それぞれの会議内容の見直しが行われ、効率的、効果的な組織体制づくりに努めている。
- ③公民館事業の交付金化の定着と積極的活用を図り、住民主体の公民館事業の展開、社会教育と地域づくりの融合をねらっている。
- ④八幡スポーツ公園6施設、ほたるドーム施設は、他市町からみても恵まれた体育施設であり、健康と生きがいをつくる生涯スポーツの推進と、競技力の向上と、なによりも、高齢者の、とびっきり元気な町づくりの拠点になっている。
- ⑤響ホールの主眼6事業は、町民の要望に応えるべく、若い人、年配の人、みんな喜ぶ、いろいろな領域分野から選定された芸術を見せてくれた。

3 地域社会が一体となった地域体制づくりの充実

・地域人材を活かし多くの町民の協働と参画に努めている。

- ①亀ノ尾の里資料館の農業資料の効果的な展示。昭和30年代まで見られた田植えや除草の作業がわかりやすく展示されていた。
- ②多彩な生涯学習が展開されている。古文書解読講座(6回)、栄寿大学(中公)、和合大学院(余目第四公)、松寿大学(立川)、町民大学の楽焼講座(清川公)、自然学部(立谷沢公)、文学部(図書館)、暮らしの彩学部・ビデオ撮影編集講座(余目第一公)、陶芸学部(余目第二公)、情報技術学部・デジカメ画像編集(余目第三公)、歴史民俗学部・文化財めぐり(余目第四公)、清川ライフアップセミナー8回(清川公)など、それぞれの地域の特性を生かしながら、誰もが参加できる多様な事業内容を展開している。
- ③青少年育成活動体制の見直し、地域全体で子どもを育てる意識の高揚が高まっている。余目第一公の「いきいきアドベンチャークラブ」「青少年ボランティア・エンジョイチャレンジャー」「親子DE楽笑くらぶ」「ひまわりっ子広場」「こうみんかんランド」などま

た、余目第三公の「平成ひまわり組」「ひまわりっ子広場」「こうみんかんランド」「Jr. Staff 四次元ポケット」「わいわい広場」「庄内総合高校老人福祉体験・ゲートボール体験、交流風づくり」など、都市化、少子化、電子メディアの普及などにより、これまで身近にあった遊びや体験の場、「本物」を見る機会などが少なくなっていることを受け、家庭・地域が連携して社会総ぐるみで、人づくりの原点である体験活動の機会を意図的に、計画的に創出していくことの必要性が提言される中で、余目第一公、余目第三公だけでなく、全ての公民館事業の中に、大きな位置を占めて定着している。

4 地域の気候、風土、文化、地域活動をふまえた庄内町が期待する体験の充実

・雪・風・吹雪の中に生きる体験活動、森林文化、米作りなどの生産活動、大人の生き方を聞く見る体験、地域の一員として共に生きるボランティア活動など、これらは各地域の広報誌によく発表されている。余目第一公おいわけ、余目第二公あゆみ、余目第三公ひまわり、余目第四公和合、狩川公風来風流、清川公民館だより、立谷沢公民館だより、青空広場だより等から拾ってみると、余目第一幼稚園の飛龍囃子、「日本一おいしい米コンテスト」の親子でお手伝い、いきいきアドベンチャークラブ、スキー教室、落合公民館「寒道」伝統行事への参加、JYA元気っ子「雪遊び体験」庄内刺し子、陶芸、水彩画、傘福等の創作活動作品展示会、「平成ひまわり組」ミニ門松づくり、みあってみあって「昔の遊び」、Jr. Staff 四次元ポケット（青少年ボランティアクラブ）、清川雪灯籠まつり、平成27年度から立川小学校の児童を対象に「放課後子ども教室」が開催されている。文部科学省が平成19年度からスタートさせた事業、保護者や地域住民の協力を得て、放課後などに子供たちに学習や様々な体験・交流活動の機会を提供するために開設したとされている。現在、全国約1万2千教室開催、この放課後子ども教室は、他校に拡大していくと、厚生労働省が留守家庭児童を対象に実施している放課後児童クラブ（学童保育）とどうすみわけというか、関わりをつけていくか大きな課題だろう。

5 一人ひとりが楽しく共に学び続ける生きがいつくりの推進

①第11回庄内町芸術祭

そのプログラムを見ると、23項目にわたる壮大な創作芸術の発表が行われている。芸術祭のテーマは「登る階、比翼のふれあい」であった。みんなで仲良く表現を楽しみながら、一人ひとりが高みを目指すために切磋琢磨して、町全体の文化の薫を高めていく素晴らしいイベントである。

②庄内町教育研修所教育講演会

門脇厚司先生の講演「子どもと大人の社会力育てが、学校と地域を救う」が魅力的だった。

③庄内町第5学年文化交流会

響ホールを会場にして、今年度から小学校5年生を対象に文化交流発表会が開催され、文化の交流が築かれた。

6 終わりに

本年度からスタートした放課後子ども教室は、「放課後の子どもの居場所づくり、地域の子どもは地域で育てる」をキーワードとしている。また、社会教育の基本方針の柱の一つに「教育の土台は家庭教育にあり」とある。

現在、多くの家庭が家庭教育に努力している一方で、家庭環境の多様化や地域社会の変化により、親子の育ちを支える人間関係が弱まり、子育てについての悩みや不安を抱える家庭が増え、子どもの社会性や自立心などの育ちをめぐる課題が生じていることもある(一般的に)。

庄内町でも、学校・家庭・地域連携協力推進の中で、あるいは公民館などを中心とした社会教育活性化支援の中で、課題を抱え、孤立しがちな家庭への地域人材によるサポート体制を構築していくことなどの方策が考えられる。親子のコミュニケーションなどによって育まれる家庭の絆や、家庭でのルールづくり、「早寝早起き朝ごはん」といった子どもたちの基本的な生活習慣づくりなどについて、親子で話し合ったり、一緒に取り組んだりすることの大切さを、地域全体でよびかけていく雰囲気と体制は庄内町にはできている。

庄内町教育振興基本計画が策定され10年先を見据えた本町教育のめざす姿と、その具体化の方策が示された。現在の庄内町の教育課題は何なのか。庄内町はどのように発展していくのか。それらを的確に把握しての策定である。

しかし、文章や言葉使いに難解なところがあり、町民には丁寧な解説が必要となろう。

最期に、「地域の子どもは地域の人で育てる」が教育の基本と考える。特に小学校、中学校の教育はその対象と云える。現実に庄内町の2中学校5小学校の教員の庄内町在住者は何人いるのだろうか。多分25%位だろう。人を育てる教師の仕事は、子どもたちにも魅力がなくなったのか、将来の職業希望に出てこなくなった。これは教師自身にも責任はある。庄内町の小中学校の学力のレベルはどの程度なのか、せめて県内でのレベルは知りたいものである。本気で学力を上げるには、地元の教師を増やすことだと思う。できれば、教員志望者大学奨学金支給制度でも作れないだろうか。